ふ爲に子供に自重心といふものなく陋劣な行ひをも爲す樣な惡癖を生ずるのであります。小學時代の惡習慣は前に述べた樣に中學時代で大部分は直ることもあるが、根強く印したものは何時までも殘り、大人となつては其強き意志の力で大抵は矯正して居るけれども、何處かに時々子供の時からの惡習慣が顯はれるものであります。

○子供は云ふ通にはならぬが爲る通りにはなる

いくら嚴しく云ひつけても懇ろに諭しても、十が十、口で云ふ通りに子供が云ふことを聞くものではありません、或時期に於ては云ふことに何でも子供が反對するは誰も經驗のあることでございませう、子供といふものは斯樣に云ふことを聞かぬものであります、爲ることは、其通りに眞似んとするものであります、試みに子供がまゝ事をするを御覽なさい、其態度から、言葉から、其母親の眞似をすること誠に上手なものです、平素斯くまでに母親の容子に深く注意して其爲る所を見て居るのであります、故に親たる者は二六時中其言行に深く注意して居らねばなりませぬ、大人は人に對して表だけを見せ其裏は匿して置きますけれども、子供は家庭の裏も表も知つて居つて、其裏表を其まゝ人に見せてしまふものであります、されば親が行ひを慎まない時は、子供の爲にならぬのみならず、子供を介して人の笑を招くことになります。

第一期の家庭教育

鹽野奇零

教育を大別して見れば三大別となる、第一は家庭、第二は學校、第三は社會、といふやうに思はれます、而して第一期は專ら精神を確定せしむるもの、第二期は智能を啓發せしむるもの、第三期は其の精神其の智能を實行する、言はゞ其の試驗場である、故に世界は一大教場と見て宜しい、今は其の第一期なる家庭の教育所謂精神を教ゆる最も大切なる學期の事につきその大要を述べん、之を又大別すれば三大別となります、第一は胎育、第二は就學前の家庭、第三は就學中の家庭とに分けて話さなければならぬ。そして世間の父母たるも

の、志望を質さば、體質の健康なる、精神の確乎たる、智能に富める、實に後來我が家我が業を起し、從つて祖先の遺風をも顯彰する、といふが如き子女を得んと欲するは、誰も共に冀ふ所である、故に西洋諸國にては、生理學上の發達の結果として、その閨中には、英雄とか、豪傑とか、學者とかいふやうなえらい人の多くの肖像を四壁に掛け連ね、或は四季折々の花卉をば瓶中にさして、その精神を爽快ならしめて、以て夫等の人にあやかりたる、小兒を得んことを望み、已に懷妊の後は、專ら母の動作に注意し、甚だしく驚くとか、甚だしく怒るとか、又は歎き憂ふるが如きは勉めて之を避け、惡しきを見ず、不祥を聞かぬ樣にすると云ひますが、之等は實に、生理學上より一理のある、遺傳とか感染とかに關はる事故實に必要なことである、之を第一胎育の期と言ひます。

然して心理學上の說を聞くに、孩兒の敎育は滿二歲前後が殊に注意すべきの期で、神經中樞の發達が日一日と加はるの時であるからして、すべての見聞せしものが精神の根源となり、また動作の適否は、即ち身體の强弱の分るゝ所である、之等の時期は寧ろ精神より、先づ體育として、あまり(たつた)とか(あんよ)とかは、强ひず自然に任せた方がよろしく、譬へば言語の上にては、(ちよち〳〵)、(あわ〳〵)(おつむてん)、等身體適應の事にして、專ら體育の方面に注意するがよい、以上は衞生上に於ても實にやかましくいふ所で、實に活潑なる精神は、健康なる身體に宿ることで、まことに大切なる時期であります。

進んで三四歲に及んでは、少しく人の談話を聞き、おかしいとか、こわいとかいふ感覺もあり、且つこの期は好んで人の話を聞き求むるといふの念慮もあれば、この時期の事は心裡に印し、永く記憶して居るもの故、之より始めて、徐々に精神の修養を勉め、よき習慣を啓誘してよろしきのみならず、折々は(舌切り雀)(桃太郎)(花咲爺)などの話より、進んでなるべく高尙に、面白いと云ふ樣にして倦ましめず、却つて彼より追求して聞きたいと言ふやうにしつけなければならぬ。

夫より五六歲に及んでは喜怒哀樂の情、善惡邪正

の別も分つて來るけれども一利あれば一害の之に伴ふもので、この期は俗に云ふ惡まれ盛りとて、多くは惡しき方に智の走りたがる、最も養育しがたき時ですが、夫等を急に戒しめんがため、頭を叩けば却て不完全なる腦を害し、白痴ともなるべく、無理にこわがらせれば恐怖心に流れ、しかりつけてばかり居れば、卑屈に陷り、あまへさして置けば、不品行、不攝生の嫌があり、實にこの時期は最も大切にして、最も世話のやける時です。夫等に適宜の所置を施すは勿論、教ふる事は、先づ、いろは、五十音、數字などに止め、非常に腦髄を痛めさせぬ程にし、談話する事に就ても、忠臣は二君に仕へず、貞女は兩夫に見えず、君耻かしむれば臣死すといふ事など論理的格言でなく、やはり通俗的に楠正成といふ人はかういふ人であつた、大石由良之助は、かういふ事をしたと、歴史談をする方が、よく兒童の心中に歸納して、益々精神を確乎たらしむるの要素ともなるものであれば、常に父兄は忠臣とか義士とかの行ひを話し、母姉は孝子とか、貞順とかの事を、頭を撫で背摩して平溫に語るがよい。

或時はまた外出に伴ひ、神社佛閣に詣で、公園等に遊ぶことあらば、夫等を好材料として、この八幡樣と云ふはかういふお方を祭り、天神樣とはかういふ人であつた、この招魂社はかく〳〵で、此の紀念碑はこうじやと、其物其事に當つて、面白く聞かする内に、不識不知の間に於て、善に就き惡を忌むの精神を確立し、よき習慣を涵養するのみならず、すでに就學に先き立つて其の地方の事物を知りつくし、自然教育の初歩を修むるものである之等を第二期就學前の家庭といふべきものです。

第三期即ち就學中の家庭は、最も其趣き方法を異にする點が生じて來る、夫は如何なる點かといふに、已に就學中に於ては、專ら學校に重きを置かしめ、教師を尊信せしむるといふ觀念を起さねばならぬ、と云ふ事は申す迄もなく、已に教育の任を託したる以上は、家庭に於ては先づ修身談、讀方、書方等學校にて教授せられたる後、退校を待ちて復讀せしめ、其見解、其要素、其訓誡等、苟

も齟齬せざる樣大に注意せねばならぬことである。

要するに、父兄たるものは、其の一家の中の教師であつて、その父兄の起居進退飲食談話等に至るまで、始終日々の行ひ方が、取りも直さず、その子弟の教育になるので、良い子供を生ひ立たせやうと思へば、一家中のものが良い行ひをして見せるより急なる事はありませぬ。家庭の教育と云ふのは即ち之でありまして、日常、仁義忠孝の行ある家には、自然に仁義忠孝の人が出來ると云ふ譯であるから古人も忠臣は孝子の門より出づると申しました、故に兎にも角にもよき人物を出さんとするには、其の父兄たる者の注意が極めて肝要であります。

人間の匂ひ

本郷生

以前米國に於ては逃走したる奴隷を追捕するに、犬を使用した事があると云ふ、之れ犬は能く其臭氣に依りて人を搜索する事をするからである。數時間も前に主人の通過したる路を、其犬が地に鼻を擦らん計りにして疾走することは、吾々の屢見たるところである。

そこで人間と云ふものは、各自が一種特有の匂ひを有して居つて、其人の觸るものには一々其匂ひを止むると云ふことは疑のない事實と考へられる。故に若し人間が犬の如き鋭敏なる嗅覺をもつたとすれば、一々の人につきて皆夫れ夫れ異れる匂ひを嗅ぎ分ける事が出來ることは疑ひはない。幸か不幸か、通例の人はかくまでに鋭き嗅覺をもたぬ、從て自分の匂ひがどんなのであるか、自分の家族、自分の友人が如何なる匂ひのする人であるかを氣付かずに居る。但し特別なる場合としては、此嗅覺の非常に發達したる人もあり、又此匂ひを特別に強くもつ人もある。多くの肯人は甚だ嗅覺の鋭いものである事は人が能く知るところである。羅馬の詩人マーシャルは、絶世の美人テーイズの香ばしき匂ひの人なりしことを述べて居る。又歷史家プルタークは、アレキザンダー大王が、